

ハイデガー「共存在」理解のための序論

— 人間にとっての「つながり」の重要性 —

A Sketch for Understanding of Heidegger's Concept 'Mitsein'

— Importance of Bonds for Mankind —

生 越 達

Toru OGOSE

目 次

はじめに

1. 「振り返り」の困難と「つながり」を断ち切る社会
2. 共存在としての人間
3. ハイデガーのとらえる共存在
4. 人間にとってプレゼントのもつ意味

おわりに

はじめに

小論の目的は、私たちにとって「つながり」¹を大切にしてくい社会が到来しつつあること、そして教育施策も「つながり」を軽視しているように見えることに対して、ハイデガーの思索に示唆を得て、人間存在にとって「つながり」が大切であることを明らかにすることである。子どもたちにかかわる例に即しながら考えてみたい。

1. 「振り返り」の困難と「つながり」を断ち切る社会

(1) 成熟社会のもとでの「つながり」の喪失

現代社会は大きく変化しつつあるように思われる。たとえば、「成熟社会」や「消費社会」の到来や「大きな物語」の喪失といったことが考えられるだろう。

もともと現代社会を「成熟社会」と捉えることには、新しい社会の到来への希望が込められていた。成熟社会とは、すでに成熟しきってしまった社会であり、その社会の高水準の物質文明は受け入れつつも、もはや物質的豊かさ・量的豊かさを追いかけ続けることをやめ、精神的な豊かさや生活の質の向上を求めていくような、平和で自由な社会を意味している。持続可能な社会であるために、もはや量的拡大を求めていくことは出来ない。しかし、そこで豊

かさを問い直すことにより、新しい価値に基づく社会を作り出していこうとするのが、もともとの成熟社会の意味なのである²。成熟社会においては、価値の変換が生じることが重要である。「物質的・手段的価値」から「精神的・表出的価値」と言われるように、そこで求められるのは、精神的豊かさのほずである。

しかし、現実の社会は逆方向に向かって進んでしまっている。ますます物質的な価値が社会を支配するようになってきているのである。そして、物質的な豊かさを求めることは消費社会を生み出す。教育的関係のなかから簡単な例を挙げて、考えてみよう。

授業のわからない一人の大学生がいたとしよう。以前だったら、自分の不勉強や頭の悪さを嘆くのが通常の反応であろう。ともかくも自分を責めるのである。彼は自分を「振り返る」ことを求められる。だが、消費者であることに慣れた彼は、自分にあったサービスを提供できない相手を責めることができるようになる。悪いのは、サービスの受け手である自分にわかるように教えられない教師の側なのである。消費社会は、自分への「振り返り」を必要としない社会、「振り返り」の能力を育てることの難しい社会である。

このような学び手の態度は、保護者をも支配することになる。ここにモンスターペアレントが誕生する条件が成立する。こうした状況は教育事象のなかに留まらない。まさにクレイマーが闊歩する社会が

成立するのである。自分のことを棚に上げて、他者を批判する社会である。

こうした社会の在り方が、教師の世界にも影響してきているのを感じることもある。教師は授業や子どもとの出会いをとおして自分の実践やかかわりを振り返り、自らを成長させていくことが仕事である。しかし、消費社会の進展により、教師もまた振り返りの能力を失い、その結果、経験のなかで学び続けていくことができなくなる。

つまり、消費社会は、学びそのものを変質させてしまうのである。学びとは、つねに自分を変えていくことであり、しかもその行き着く先は学びの開始時点ではわからないはずである。だからこそ学びなのである。ところが、学びが消費のなかに呑み込まれてしまえば、学びは役に立ちそうなものを買うという行為を意味することになり、つまり学びの開始時点で、その学びに買う価値があるかどうかが決定的にされることになる³。

このことは、教え手にとっての不幸であるだけでなく、学び手にとってこそ不幸な事態を生じさせることになるだろう。なぜなら、こうした事態は学びへの意欲を奪うことになるだろうし、さらには自分さえをも消費社会の眼差しのもとで理解せざるを得なくなり、結果として自らの存在意義を疑うことになってしまうからである。そして自分は消費に耐える存在であるかがつねに問われることになってしまうからである。消費社会においては、自尊感情を保つことが難しく、「どうせ自分なんか生きていても仕方ない」といった気分になりやすいのである。

このところ、子どもたちの学習意欲の低下が危惧されているが、自尊感情が保ちにくい社会においては、頑張ることも難しいだろうし、また成熟社会においては、頑張っても成功する可能性は低いのである⁴。たとえば、宮台は、「『頑張れば報われるんだ』というメッセージも、まるでウソっぱち。成熟した近代では、頑張っても報われないんです。確かに、近世の成熟の途上にある社会では、頑張れば自分も社会も豊かになると信じるのができた。だから今を我慢して頑張って働けば、必ず報われる人間もいたわけです。ところが近代が成熟すると、必死になって勉強をして、いい中学、高校、大学に入って、いい会社に入ったからといって、幸せになれるかと

いうと、大いなる確率でそうはならない」と言っている。

たしかに日本は現在大変な格差社会になっている。OECDが2010年に実施した貧困率の国際比較においても、日本の相対的貧困率は34カ国のなかで29位、子どもがいる一人親世帯の貧困率では33位だったのである。かつて一億総中流といわれた日本は急激に格差社会に変化しつつある。

別の視点から見てみよう。

マイケル・サンデルは、「世の中にはお金で買えないものがある。だが、最近ではあまり多くはない。いまや、ほとんどあらゆるものが売りに出されているのだ。」⁵と『それをお金で買いますか』の序章のはじめのところで述べ、その後にお金で買えるものを列挙している。その中には、相当な寄付をすることで子どもを名門大学に入学させることや成績不振校が、子どもが本を読む度にお金を払うことなど教育に関わる事例も含まれている。「社会生活において市場価値の演じる役割はどんどん大きくなろうとしていた。経済学は王土になりつつあった。こんにち、売買の論理はもはや物的財貨だけに当てはまるものではなく、いよいよ生活全体を支配するようになっていく。」⁶のだ。

現代社会は、相変わらず物質的な豊かさを追い求め続けており、ほんの少数の豊かな層と多くの相対的貧困者を生み出している。そして、ますます私たちは物質的豊かさを追い求めざるを得ないところへと追い込まれていく。なぜなら、サンデルが指摘するように、ますますお金で買えるものは増えていくからである。「市場と市場価値が、それらがなじまない生活領域へと拡大した」⁷。

お金で買えるものが増えたとき、私たちは、その社会のなかでどのような人生を選択することになるのだろうか。そこでは、さまざまな感情が生まれてくるはずである。いわゆる負け組からすれば、妬みや劣等感、勝ち組からすれば、優越感や他者を軽く見る気持ちが生じてくるであろう。いずれにしても、「あらゆるものが商品となってしまったせいで、お金の重要性が増し、不平等の刺すような痛みがいつそうひどくなった」⁸社会のなかで、「市場の道徳的限界を考え抜く必要がある。お金で買うべきでないものが存在するかどうかを問う必要がある。」⁹ということになるだろう。

しかも、この格差社会を自己決定・自己責任の論理が支えている。つまり、勝っても負けても、その原因は自己に還元されるのである。こうした社会においては、人と人がつながることは難しくなるだろう。自己決定・自己責任の論理に支えられた格差社会では「つながり」が失われていくのである。

(2) 「大きな物語」の欠如と「つながり」の喪失

もっと直接的に人と人との「つながり」を喪失させる状況も生じている。日本人はこれまで世間によってコントロールされていた。こうした社会は、人々に安心感を与え、またどのように生きたらいいのかという指針を与えてくれる。もちろん、いいことばかりではない。このような社会では個人の自由は一定程度奪われることになる。

たとえば内藤は、このような日本社会のあり方がいじめの温床であると考えている。少し彼の論に沿って考えてみよう。

内藤は学校を次のように捉えている。「日本は、学校が児童生徒の全生活を囲い込んで、いわば頭のとっぺんから爪先まで学校の色に染め上げようとする、学校共同体主義イデオロギーを採用している。……学校では、ひとりひとりの気分やふるまいがたがいの深い部分にまで影響しあう、集団生活による全人的な教育の共同体がめざされ、それがひとりひとりにきめ細かく強制される。若い人たちは、一日中ベタベタと共同生活することを強いられ、心理的な距離を強制的に縮めさせられ、さまざまな『かわりあい』を強制的に運命づけられる。……学校運営の根幹は、生徒たちに日々調教して、その骨の髄まで沁み込んだ習慣の内側から、この『学校らしさ』を実現し維持することにある」¹⁰。

内藤は、こうした社会では、空気を読み合いながら、ノリで生きることを求められるようになるという。「空騒ぎしながらひたすらノリを生きている中学生のかたまりは、無秩序・無規範どころか、こういったタイプの仲間内の秩序に隷従し、はいつくばって生きている」¹¹。そして、こうしたノリで生きる社会のあり方を群生秩序¹²と呼んでいる。

そして、こうした秩序のもとでは「自分たちのノリを外した、あるいは踏みにじったと感じられ、『みんな』の反感と憎しみの対象になるといったことが、『悪い』ことである」¹³ののだという。「このよう

な『ノリの国』では、個の尊厳や人権といったヒューマニズムは『悪い』ことであり、反感と憎しみの対象になる。彼らにとっては、その場その場で共振する『みんな』の全能感ノリを超えた普遍的な理念に従うことや、生の準拠点を持つことは『悪い』。自分たちの『ノリの国』を汚す普遍的な理念に対して、中学生たちは胃がねじれるような嫌悪と憎悪を感じる。」¹⁴。さらに、彼は、「その場の空気を読んで同調することが唯一の規範である学校共同体では個人の責任などという事態は生じ得ない」¹⁵とさえ言う。

もう少し彼の言う「群生秩序」について考えてみよう。「ノリで響きあう『みんなの空気』は彼らの秩序の根幹であり、人の命よりも大きな価値がある。……このようなノリの秩序から、独特の身分感覚が発生する。それは、ノリという『高次の生命』のそのときそのときのありさまから位置づけられる限りでの、身分的な人間の存在感覚＝〈分際〉である。」¹⁶こうした状況で、いわゆるスクールカーストが成立することになる。

内藤は、「すなお」ということに焦点をあてて、次のようにも言っている。「学校では、『すなお』ということは集団の倫理秩序にもなっている。『すなお』でないものは『ジコチュウ（自己中心）』で『悪い』。だから痛みつける。……これが、『みんな仲良く』を完膚無きまでに押しつけようとする学校制度の帰結である。」¹⁷

このような学校において、上記に述べたようなスクールカーストができあがり、そこでは「身分が下とされる者に対等な態度で『いられる』と、手痛い攻撃を加えずには気持ちがおさまらない。しかもこのような加害者たちは、なぜだか被害感情を有している。」¹⁸さらに、内藤によればこうしたスクールカーストに教師も呑みこまれていくことになる。「学校の教員はしばしば、教育サービスを受けている若年者のほんのちょっとした仕草や服装が『生徒らしく』ないと感じるとき、何か自分の世界を壊されたかのような、どうしようもない被害感を感じて『キレ』てしまい、ひどい暴力を振るったり、罵詈雑言を浴びせたりする。」¹⁹ようになると言う。

内藤は学校における人間関係について次のようにまとめている。「学校共同体では『単純明快につきあわない』ということができない。朝から夕方まで過剰接触状態で『共に育つかかわりあい』を強制す

る学校では、心理的な距離の私的な調節は実質的に禁止されている。」²⁰そして、「このような政治的共生以外で、各人が各人のやりかたで善く生きる生のスタイルを追求することは、学校共同体ではできない。学校では、選択の余地のない特定の『仲間』集団の共生が善い生であると前もって決められており、それがどんなに醜悪なものに感じられても、与えられた『みんな』の共生スタイルを生きなければならぬ。」²¹さらに内藤は、こうした学校のあり方が、「受け継がれて肥大化し、人々の生活を隅から隅まで覆い尽くした社会」²²ができたと考える。

たしかに、内藤の言うような、空気を読み合う子どもたちに出会うことがある。そこで、いくつかの問いに答える必要がでてくる。第一に、学級集団、さらには学校集団が、こうした空気の読み合いから自由になり、異質性を受け止め合う場になることはできないのだろうか、という問いである。第二に、それでは本当に、果たして内藤の言うように、学級集団を否定すれば、個人と個人が自由にかかわることができる社会が到来するのだろうか、という問いである。

小論においては、この問いを、大きな視点から、つまり私たち人間にとって人との「つながり」をどのように考えたらいいのか、という側面から、考えてみたい。なぜなら、いっぽうで、子どもたちの他者と「つながりたい」という思いは、内藤の主張の枠組みを超えているように思われるからである。

日本社会は、かつて世間という「大きな物語」をもっていった。この世間は、たしかに私たちを縛るものであった。だが、一方で生きていくうえでの「安心の地盤」と「生きる方向性」を与えてくれるものでもあった。小論では詳しく論じることはできないが、こうした「安心の地盤」と「生きる方向性」は、自己形成に寄与する側面をもっていった。

子どもたちとかかわっていて気づくことは、彼らからこの「安心の地盤」と「生きる方向性」が奪われていることである。その結果、彼らは強い孤立感をもつようになり、彼らの人間関係が「同調」と「風景化」で色づけられていく。とするならば、内藤のいう「空気を読み合う関係」は、むしろ世間という大きな物語を奪われた結果なのであり、その大きな物語を奪われた後にも、世間が成立していたときの負の側面だけが亡霊のように残っていて、それが子

どもたちの「空気を読み合う関係」を強固なものにしているとも考えられるのである。

内藤のいうように、「大きな物語」はつねに「空気を読み合う関係」を作り出してしまおうのか、それとも別の可能性があるのか、について考えてみる必要があるだろう。また、いずれにしても、子どもたちがつながりを喪失して深い孤立感をもっているとするならば、孤立感から解放される関係のあり方について考えてみる必要があることになるだろう。

以下、「つながり」をキーワードにして、考えを進めてみたいと思う。内藤は、いじめと関連づけて「空気を読み合う関係」を取り上げているが、まさに内藤の指摘は道德教育にもかかわっている。彼が言うように、空気を読めないことが「悪い」という、いわば道德観が教室を支配しているとすれば、いくら道德教育で友情、信頼や親切、思いやり、さらにはよりよい学校生活、集団生活の充実といった内容項目を取りあげて授業をしても、嘘くさいだけのようにも思われる。

以下の仮説が成り立つ。人間にとって「つながり」は必要である。そして、物語の共有は、つながりにとっての重要な力となる。人々を孤立感から解放してくれるからである。ただし、その「つながり」のあり方には注意を払わないといけない。「空気の読み合い」、「同調」や「風景化」がその関係を色づけてしまっているのか、そうではない関係の在り方がありうるのか。

以下においては、まずは、人間にかかわるいくつかの事象を取り上げて、多様な視点から人間の「つながり」について考えてみたい。

2. 共存在としての人間

以下において、人間存在をどのように捉えたらいいのかについて、NHKスペシャル「ヒューマン」のなかで示されたさまざまな例を用いて考えてみたい。

(1) さまざまな視点からの「つながり」の重要性

① 「他者とともに生きる存在」としてのホモサピエンスとルールの必要性

人間は協力的行動によって生き延びてきた存在である。始まりは、ホモサピエンスの誕生である。ホモ

サピエンスは6万年前ごろから驚異的なスピードで世界中に広がっていき、5万年前にはすべての地域に居住するようになる。

ところが、その際に、50万年前に枝分かれしたネアンデルタール人と生存競争をしなければならなかったのである。ネアンデルタール人は、ホモサピエンスに比べて体がずっと大きく、石器の使用や脳の大きさなどから考えると、知的にもホモサピエンスと同じ程度だったことが予想される。ネアンデルタール人とホモサピエンスの間では1万年にわたる生存競争が繰り返されたのであるが、最終的にはホモサピエンスが生き延びることになった。それはなぜなのだろうか。

放送では、ホモサピエンスが集団行動の可能な存在だったのに対して、ネアンデルタール人は単独行動だったことによると考えている。つまり、人間は、そもそもの出発点から「他者とともに生きる存在」だったのである。

さらに、さかのぼって類人猿と比較してみよう。われわれ人類とチンパンジーとは700万年前に枝分かれをし、両者は、遺伝子レベルでは1パーセントしか違いがないのだという。人間を含む類人猿は、協力行動を行うことが知られている。山際寿一は、人類（類人猿を含む）にとって、食事をとることは、生理的な行動ではなく、「社会交渉の発明」ともいえる文化的装置だととらえる。食べるということは、「ともに」食べるという行為を通じた「互いの社会的な関係を確認しあう一種の儀礼」であり、「食物はいたるところで人々の出会いを和ませ、平和な関係を築くことに貢献している」²³。

だが、人間とチンパンジーは、協力行動の在り方に関して、いくつかの点で大きく異なっている。

第一の相違点について考えてみよう。

ひとつの実験がある。二つのつながった檻にチンパンジーが入れられている。片方のチンパンジーの檻の外には大好物のジュースが置かれているのだが、手は届かない。もう一方のチンパンジーの檻には長い棒が置かれてあり、それを他方のチンパンジーに貸してあげればジュースが取れるようになっている。この場合、長い棒をもったチンパンジーは要求されれば棒を与えることができる。だが、実験を何度繰り返しても、彼らは自分から棒を渡すということはないのである。チンパンジーほどの知能

があれば状況は理解されているはずである。それでもそうした能動的協力的行動はとらないのである。

放送では、この相違の理由を出産の違いから明らかにしようとしている。人間は二足歩行へと進化したために骨盤が狭くなり、出産に際して、他者の協力を必要とするようになった。つまり二足歩行の選択は、同時に、「他者とともに生きる存在」の選択だったというのである。人間は、出産にとどまらず、子育ても協力しておこなってきた。極めて無力で生まれる人間の赤ちゃんは、親だけではなくさまざまな人々の協力関係の中で育てられてきたのである²⁴。出産や子育てをとおして人間は自発的に助け合う習慣を育み、「ともに生きる」ことを進化させることで生き延びてきたのである。つまり、人間にとっての出産や子育てのあり方は、人間が「他者とともに生きる存在」であることを示していることになる。

第二の相違点は、集団の規模に関する相違点である。

放送によると、霊長類の法則というものがあるのだという。集団のサイズは大脳新皮質の大きさに比例して決まってくるという法則である。それによるとテナガザルでは15匹、ゴリラで35匹、チンパンジーで65匹が集団としての限界だということになり、人間では150人ほどになる。実際に、狩猟採集をしている民族では、150人ほどを単位に集団を作っているのだという。これ以上の人数は脳で処理できる範囲を超えてしまっているために、さまざまなトラブルが生じてしまう。

だが、人間は集団の大きさを強みにして進歩してきた。生物的な限界を、工夫によって乗り越えてきたのである。そして、家族親族を超えて、生き延びていく上でのさまざまな問題にとりくむ人の数を増やすことによって、さまざまなアイデアが生み出され、人間は進化発展してきたのだという。

だとするならば、やはり大きな集団のネットワークは必要なのであり、異質な他者とともに生きていくことのストレスがあるとしても、人間存在にとって、他者が非常に重要な役割を果たしてきており、異質な他者とつながることなしに人間存在の可能性はないということになるだろう。そうだとするならば集団であることのストレスを理由に、「他者とともに生きる存在」としての人間を否定することは、

人間存在そのものの否定を意味することにもなるだろう。

人間は、さまざまな工夫を用いて、「他者とともに生きる存在」であることを育んできた。放送のなかに示されていたいくつかの例を挙げながら、具体的に考えてみたい。

ひとつは、つねに関係確認を怠らないということである。アフリカブロンボスの洞窟には10万年前の地層が出てきているのだが、そこには化粧道具や首飾りが出土するのだという。つまり人類は10万年前から化粧を行い、一生懸命に首飾りをつくっていたのである。それではなぜ首飾りをつくっていたのであろうか。

放送では、現代の狩猟採集民族であるカラハリ砂漠のナンの人々の観察をとおして類推しようとしている。ナンの人々にとって化粧は同じ仲間であることの証である。またとくに首飾りのもつ意味は象徴的である。ナンの人々は、自分で作った首飾りをもとに暮らす仲間にプレゼントするのである。たくさん首飾りをプレゼントしてもらうことは仲間が多いことを意味する。つまり、首飾りの作成は仲間にプレゼントするためなのであり、プレゼントすることは仲間関係の確認である。プレゼントには自分を受け止めるというメッセージがこめられており、プレゼントのやりとりはともに生きていこうとする意志や、協力し合う大切な仲間であることの確認を意味しているのである。

確かに食料にありつけるのが困難な社会において、首飾りを作っているのはおかしなことに見えるかもしれない。だが、食料を見つけることができるかどうかは運に左右される以上、食料が見つかったときに、それを独り占めするのではなく助け合う関係を作っておくことは、実は助け合わないと生きていけない社会にとっては、戦略として正しいのかもしれない。また人間存在が「他者とともに生きる存在」であることにとって、「助け合うこと」が非常に重要な意味をもっていることが理解できる。私たちは「助け合う存在」なのである。

プレゼントは、血縁を超えた協力関係と結びつくとき、いったいどのようなものになっていくのだろうか。放送によると、黒曜石がそれに使われたという。黒曜石は、お金として使われることもある貴重なものだったが、生死を分けるような状況のなかで、

黒曜石は広い地域に広がっていったのだという。つまり人間は危機的状況のなかでプレゼントの中身を食べ物から一般性や恒常性を備えた黒曜石へと変えていくことで、協力関係を拡大していったのである。

現代のものだが、放送では、面白い心理実験についても紹介している。アメリカでの研究だが、お金を分配する場合、自分で独り占めしてしまう民族はどこにも存在しないのであって、分け合おうとするのだといった実験である。つまり食べることから始まった「ともに生きること」はお金の分配へと広がっていったのである。そう考えると、利益を個人に還元しようとする新自由主義の考え方は、もともとの人間の考え方とは適合していない可能性が示唆される。

②「他者ととともに生きる存在」と顔の認識の重要性

人間が「他者ととともに生きる存在」であることは、人間にとって「顔」が特別の意味をもつことへとかわっている²⁵。

放送では、視覚野の損傷により映像処理ができなくなったため盲目になった人に、顔の映像を見せ、その表情がポジティブなのかネガティブなのかを問う実験が紹介されている。実験では、何も見えないはずの被験者が、人の顔だけは見え、しかもその表情がネガティブなのかポジティブなのかさえも判断できることが示される。その理由は単純で、人の顔情報だけは、視覚野だけでなく、人の命や危険にかかわる情報が集まる部位である扁桃体にも送られているからである。

重要なのは、こうした人間の能力は、人の気持ちを察することが非常に重要な意味をもっていることを示しているということである。すでにチンパンジーと人間との違いとして述べたことだが、人間が自発的に協力する存在だということは、人の気持ちを察することが必要な存在だということの意味する。他者からの要求があってはじめて協力するのではなく、人の表情をとらえ、気持ちを察して、自発的に協力できるのが人間なのである。顔から表情を捉える力は人間を人間たらしめている能力なのである。

放送では、その他にもいくつかの面白い例が挙げられている。ひとつは笑いについてである。イラク戦争の際、アメリカ軍が和平交渉のために宗教指導

者を訪問する。だが言葉が通じないため、人々は自分たちを捕らえにきたのではないかと殺気立つ。そのときに、司令官は軍人たちに「笑え」と指示をするのである。すると、人々はアメリカ軍に敵意がないことを理解し、緊張感がとける。

もうひとつは赤ちゃんを被験者にした実験である。赤ちゃんにイタリアの画家であるアルチンボルドによって描かれただまし絵を見せる。その絵は、野菜などが入れ物に入っているように見えるが、さかさまにすると顔に見える絵になっている。赤ちゃんは、顔に見えるような方向で見せるとその絵を好んで見るようになり、また脳の活動を調べてみると、顔に見えているときに活発に動き出す²⁶。

そもそも、ピアジェによると自己中心性のなかにはいると考えられる1歳半程度の赤ちゃんが、ほかの子が泣いていると自分の大好きなおもちゃをその子に渡そうとするという事実が、人間にとって協力行動が非常に早期から見られることを示している。他者を他者として認知することより早く、協力行動は現れるのである²⁷。

③食事の重要性（察すること：能動性）と道徳

考えてみると食事は、個人的な行動である。藤子不二雄の漫画に、食生活と性生活の秘匿が逆転しているものがあつたが、たしかに性交渉には子孫を残すという社会性がある一方で、食生活は個人の生存のために行われる「利己的」行動である。しかし、だからこそ、そのもつ社会性にとっての意味の大きさがあるのではないかと思われる。

社会生態学の立場から、山際は「チンパンジーやボノボでは口から口へ、手へと食物が譲渡される。ゴリラでは食物が渡されることはないが、採食場所が譲り渡される。狩猟によってたまに得られる肉は別として、分配される食物は分配されなければ得られないほど貴重なものではない。明らかに食欲に迫られて分配を要求しているのではなく、分配という行動を相手から引き出すことが目的となっている。つまり、分配行動を通じて相手と自分のきずなを確かめているわけだ²⁸。つまり類人猿にとって、食が個に帰属する行動であるからこそ、社会性の確認のために、食事という個に帰属する行動の持つ意味を「ともに生きる」ことへと転換することが必要だったのだろう。

しかもここで「社会性の確認」は、無意識的に行われる。山際は次のようにも言っている。「食物の分配は、今まで競合の源泉だった食物を利用して社会関係を調整しようとする行為で、まさに食の社会化と呼ぶにふさわしい。食物を前にして劣位者が抑制する社会では、複数のサルが向かい合って仲良くいっしょに採食する姿はめったに見られない。しかし、類人猿では優位者が抑制し分配するために、仲間同士が向かい合って同じものを食べることがよくある。食の社会化は食べる行為を個体から集団へと移し、共食を実現させる働きをしたと考えられる。」²⁹「食事が共に食べるという行為を通じて、互いの社会的な関係を確認しあう一種の儀礼だからである。」³⁰「食物はいたるところで人々の出会いを和ませ、平和な関係を築くことに貢献しているのである。」³¹

とくに類人猿では、「優位者が抑制し分配」するということが大切な意味をもっているだろう。優位者こそが個人の欲である食欲を抑制することを求められるからである。ここには優位者こそが自分を抑えるという逆説が成り立っている。

山際は一般的に次のように言っている。「食事には食欲を抑制することが不可欠だからである。採集するとき、食物を持って帰るとき、仲間に分給するとき、共食するとき、人間は何度も自分の食欲を抑えなければならない。抑制することによって人々は仲間とともにいること、仲間と同調して生きていることを感得するのだろう。」³²

「人間の食事には長い人間の進化の歴史が濃縮されている。食事をするために必要な抑制と同調は、私たちの祖先が高い知能をもつ前に獲得した人間の社会性の原点ともいべきものだ。ところが、現代の人々は食べるという行為の中に本来埋め込まれているはずの社会性をだんだん失いつつある。それは、人々が食べるという行為にあまりにも効率を求めすぎた代償だと私は思う。古くから人間は食べるということに過大な手間と時間をかけてきた。親しい仲間といっしょに食べる快楽、未知の仲間と食卓を囲む喜びと興奮は、人間だけが持っている貴重な進化の遺産である。食事という社会的行為が消滅したとき、人間の社会性も危機に直面する。多様な文化や民族が交錯しあう現代、私たちは食卓を利用してさらに新しい社会性を手に入れられる時代を迎え

ている。」³³

ここには重要な指摘がある。ひとつは、食事をとおして私たちは社会性を身につけてきたという点である。だが、この食事の社会性が失われようとしている。食事を独り占めにしない、個に閉じ込めないことは私たちの社会性の原点なのである。もうひとつは、食事のなかに道德の原点があるということである。食事とは、他者のために自分の欲望を我慢することを内在させている。人間とは、他者がおいしそうに食べていることを喜ぶ存在なのであり、その喜びという感情が道德の原点にあるはずなのである。

④身近な他者の限界と道德の必要性

食事やプレゼントをとおして「ともに生きる存在」であることを確認するためには、少なくともその集団がある程度の数に収まっていなければならない。人類は、こうした集団を構成する人数の増大に対してどのように対応してきたのだろうか。すでに先に脳の大きさと集団の規模について述べたが、それによると人間は150人程度を超えた集団ではうまく対応できないことになってしまう。すでにプレゼントのもつ意味については考えてみたが、ルールの問題についても考えてみなければならないだろう。

「他者とともに生きること」が、顔を認知することと深くかかわっていることは、顔がルールになることを意味するだろう。放送でも面白い実験が紹介されている。一杯50円のセルフサービスのコーヒーが設置されている。50円支払うようにという掲示だけだと1割程度の人しか代金を払っていかないのだという。だが、そこに人の目の絵を描いておくと、7割の人が支払うというのだ。そう考えると日本社会が従来もっていた世間の目は「他者とともに生きる」ことを選択した人類にとって、その選択を維持するための非常に有効な手段だったことがわかる。もうひとつ、放送で紹介されているのは投擲具の発明である。だが、この点は、小論の範囲を超えているので別に機会に論じることにしよう。

そういった「世間の目」がうまく機能しないとすると、やはりルールをつくり、それを守って生きていくことが求められるようになるだろう。脳の限界を超えた他者とのつながりを維持するためには、何らかのルールをつくって、そのルールに基づき罰を

与えることが必要になる。現代社会が、グローバル化して、無数と思われるほどの人々と交流しなければならない状況においては、「世間の目」となるようなルールとそれを守らせる仕組みを作っておくことがどうしても必要なのである。だが、ルールを守らせる際に忘れてはならないことは、もともとは他者の眼差し、ひいては他者との「つながり」がルールの根底にあるということである。

人間には、他人の痛みを不快に思う仕組みが備わっているという。このことは、「他者とともに生きる」存在にとっては重要な仕組みだろう。だが、一方で、それが罰だということになると、他人の痛みが快樂になるのだという。

放送では、一つの実験が取り上げられている。女性が男性のほほを平手打ちする映像を見せる。すると、映像を見た人は不快に感じる。ところが、そこで、「この男の人は、彼女にひどいことをしたのです。これはその罰なんです」と説明を加えると、側坐核という部位が働きだし、人は快樂を感じるのだという。私たちは、集団で生きてきた「共存在」であり、だからこそ他人の痛みを不快に思う仕組みが備わっていると同時に、罰を与える快感を得る仕組みも備わっているのである。

まずは他者の痛みを感じる必要があるだろう。この力はすでに述べたように、赤ちゃんにも備わっている能力である。だが、私たちが社会生活を送っていくためには、やはりこうした共感性を乗り越えて、ときに罰を与えることが必要なのである。

もちろん、できるだけ罰を与えないですむような関係を築くことも求められるだろう。現代のような激しい競争社会では、どうしても、争いが増えていく可能性が高まる。そして厳しい格差社会が生まれているという事実がある。触れ合うことを増やすことで争いを減らすことも必要かもしれない。オキシトシンというホルモンは身体や心が触れ合ったときに出てくるのだという。そしてこのオキシトシンが信頼感を生み出すのだという。だとするならば、やはり私たち人間にとって「触れ合う」経験が重要な意味をもつはずである。

もうひとつ、新自由主義的な考え方の危険性についても考えなければならないだろう。たしかにお金が人間の交流を広げ、放送でも言われていたように、職業や都市、さらには未来をつむぐ力を生み出して

きたのは事実である。だからこそ、もともとお金が「信頼」の上に成り立ってきたことを踏まえて、お金の流通を「つながり」から切り離してはいけないのだと思う。

放送ではカメルーンのパカ族が紹介されている。そこでは狩猟でしとめた食料は、みんなに公平に分け与えられる。何でも平等なのであり、自分だけ溜め込むこと、他人にぬきこんでることは悪なのであり、陰口をたたかれるのである。しかしお金の発明によって社会は変化する。お金の発明により、限度なき欲望が生み出され、そのことが大きな経済格差や、さらには大量殺戮を生み出してしまったのである。まさにこの現代こそ、新自由主義的な考え方の影に対してどのように向き合ったらいいのかが問われている。

いずれにしても、取り上げてきたさまざまな事例は、人間が「他者に呼びかけられた存在」であることを意味しているように思われる。他者との「つながり」は人間存在にとって必須の構成要素なのである。自己が成立して始めて他者との関係が始まるのではなく、自己の根底に他者との「つながり」が組み込まれて内在しているということである。こうした事実について、次は、ハイデガーの思索をたどることにより、考えてみよう。

3. ハイデガーのとらえる共存在

(1) 人間存在の両義性

『存在と時間』を読むかぎり、人間（「現存在 (Dasein)」）は「共存在 (Mitsein)」として規定されている³⁵。だが、彼の記述によると、人間は「世界内存在 (In-der-Welt-sein)」なのだが、その人間は、日常的には「頹落 (Verfallen)」して「世人 (das Man)」として存在している。そしてこの頹落から脱却し、「本来的自己 (eigentlich Selbst)」を取り戻した人間は、道具的存在者から単独化するのであって、したがって、他者との関係性からも身を引いた存在であるように思われる。

少し丁寧に見てみよう。第一に、日常的に、人間は共存在である。だが、この共存在は世人としての頹落を意味している。そこで第二に、この頹落からの取り戻しということが問題になる。そこに本来的

自己が成立するのだが、その際の自己が共存在ではなく、単独化した自己ではないかということが問いとして生じる。

たとえば、アーレントは、世界内存在の状態を以下のように記述している。「ハイデガーの哲学の枠組みのなかでは、人間は次のような仕方で『頹落』へといたる。人間は、世界-内-存在としては、自ら自身たることなく、むしろこのような彼の存在のうちへと『投げ込まれて』(geworfen) いる」³⁶。この記述を読むと、あたかも、共存在とは頹落であり、自ら自身ではありえないのであって、つまり本来的自己であるためには、その共存在から抜け出すことを求められているようにも思える。

そこで頹落からの取り戻しについて見てみよう。ハイデガーによれば、この取り戻しは死への先駆 (Vorlaufen in den Tod) によってなされる。「死への存在 (Sein zum Tode)」である人間は、死によって世人自己から引き離されるのである。ハイデガーは言う。「現存在の死は、もはや現存在しえないという可能性なのである。現存在がおのれ自身のこのような可能性としておのれに切迫しているときには、現存在は、おのれのもっとも固有な存在しうることへと完全に指示されている。このようにおのれに切迫しているときには、現存在においては他の現存在とのすべての交渉は絶たれている」³⁷。

死という存在可能性を引き受ける際に、人は他者との交渉を絶たれるのである。「死は、現存在を単独の現存在として要求する。先駆において了解された死の没交渉性は、現存在を単独の現存在へと単独化するのである。この単独化は『現』を実存のために開示する一つの仕方なのである。この単独化があらわにするのは、最も固有な存在しうることへとかわりゆくことが問題であるときには、配慮的に気遣われたものもとのすべての存在および他者たちと共なるあらゆる共存在が、何の役にも立たないということ、このことである」³⁸。

アーレントも、「自己のもっとも本質的な特性は、その絶対的な自己中心性 [Selbstischkeit]、それがすべての仲間から根底的に分離していることである。この本質的な特性を規定するためにハイデガーが導入したのが、実存論的なものとしての死への先駆だった。というのも、死のうちでこそ、人間は絶対的な個体化の原理を自覚するからである。ひとり

死のみが、人間をその仲間たる人びと—『世人』として彼が自己であることをたえず妨げる者たち—との結びつきから引き離す³⁹と述べている。ハイデガーの記述は、死への先駆によって人は他者から切り離され、単独化するのだが、そうした自己存在は、もはや共存在ではないと言っているように思われるのである。

次に良心について考えてみよう。ハイデガーによれば、良心によって、人は本来的な自己存在しうることを了解するようほめかされるからである。小論では、とくに良心において「誰が呼ぶのか」に注目してみよう。ハイデガーによれば、それは現存在自身である。つまり決して良心の呼び声は他者から届けられるのではなく、自己の内からやってくるのである。

この点は、一見すると不思議な感じを与える。

さらにハイデガーは次のようなことを言って、私たちが混乱させる。「呼び声は、じつのところ、われわれ自身によって計画されたり、準備されたり、自発的に遂行されたりするものでは、全然ないのである。『それ』が呼ぶのである、期待に反して、それどころか意思に反してすら呼ぶのである。……呼び声は、私のなかからやってくるのだが、しかもそれについて私のうへへと襲いかかってくるのである。』⁴⁰

良心の呼び声は、決して神といったような外から訪れるものではない。「良心の声は、現存在のなかに突き入ってくる見知らぬ力として解釈されてきたのである。こうした解釈の方向を進んでいって、ひとは、この固定された力の根底に、その所有者を置いたり、あるいは、その力自身を自己告知する人格(神)だとみなしたりするのである」⁴¹と述べる。ハイデガーは、良心が神であるといった考えを否定し、その声が外から訪れること否定しつつも、一方では、それが、見知らぬ力として訪れると捉えている。

そして、この良心の呼び声は、人間が「責めある存在 (Shuldigsein)」であることを了解させようとする。「責めある存在」とは、人間が「非力」であるということを意味する。人間は、おのれの存在を根拠づける力を欠いているのである。ハイデガーは言う。「自己は、自己そのものとしてはおのれ自身の根拠を置かざるをえないのに、そのおのれ自身の根拠を支配する力をけっしてもつにいたりうるのでは非ざるものであり、それでいながら、実存しつつ、

根拠であることを引き受けざるをえない。』⁴²また、「現存在は、これかあれかの可能性のなかにそのつど立っており、不断に現存在はその他の諸可能性であるのでは非ずして、その他の諸可能性は実存的企投のさいに断念してしまったということ、これである。』⁴³

こうした記述をどのように理解したらいいのであろうか。

ハイデガーは、次のように述べている。「決意性は、本来的な自己存在として、現存在をその世界から引き離したり、現存在を宙に浮いた自我へと孤立させたりしない。決意性がどうしてそんなことをすることがあろうか—なんとしても決意性は、本来的開示性として、世界内存在として以外には決して存在することがないからである。決意性は、自己を、まさしく道具的存在者のもとでのそのときどきの配慮的に気遣いつつある存在のなかへと引き入れ、また自己を、他者と共なる顧慮的に気遣いつつある共存在のなかへと押しやるのである」⁴⁴。

この記述は、人間が本質的に他者と共に存在していること、すなわち「共存在」であり、本来的自己においても、けっしてこの共存在から免れることはできないことを述べている。しかし、だとするならば、この一見矛盾するような両義性を備えている共存在をどのようにとらえたらいいのであろうか。

いずれにしても、私たちが日常的に使っている「共同性」概念をいちど破壊⁴⁵し、問い直し、新たな「共同性」を創設することが求められていることは確かである。だが、それは具体的にはどのような「共同性」なのだろうか。

ハイデガーは他者を「共現存在」であるにとらえる。つまり、私たちは、自己にとって他者は顧慮的気遣いの対象であると同時に、この自己もまた他者の顧慮的気遣いの対象であることを知っている。自己は、けっして自らの存在を根拠付けることができないのであって、自己の存在を了解するためには、他者との関係性が必要であり、しかも自己が他者の顧慮的な気遣いの対象になるといった意味での関係性が必要だということが重要な意味をもつのではないだろうか。

つまり、自己が他者の顧慮的気遣いの対象であるという受動性を被っているということが自己了解の本質的契機なのでないかということである。

(2) 「共存在」と聞くこと

これまでのハイデガーの思索を追っていく限り、やはり人間はあくまでも共存在であり、本来的自己となるためには世人自己からの単独化を求められるにしても、その意味することは共存在から抜け出すことではなく、あくまでも共存在であり続ける、そしてこうした共存在にとって、自己は他者の顧慮的気遣いの対象であるという受動性のうちに存在していることが深くかかわっていくこと、が理解できた。

この共存在の受動性は「聞くこと」と関係している。ハイデガーは言う。「誰かの言うことを聞くことは、共存在としての現存在がその他者に向かって実存論的に開放されて存在していることなのである。それどころか聞くことは、あらゆる現存在がたずさえている友の声を聞くこととして、現存在がおのれの最も固有な存在しうることにむかって第一次的に本来的に開放されていることすら構成している」。⁴⁶

ここには、人間にとっての「聞くこと」の重要性が述べられている。人間は聞く存在なのである。人間は、自己として成立した上で、その次に温情として、他者の存在を聞き取ろうとする存在なのではなく、自己が本来的自己として成立するために、他者の存在を聞き取ることが求められるのである。人間は、聞くことをとおしてはじめて本来的自己へと至ることのできるという意味で、いついかなるときにも共存在なのである。

ハイデガーはさらにいう。「他者たちと共なる了解しつつある世界内存在としての現存在は、共現存在とおのれ自身とに『聞きつつ聴従して』いるのであり、この聴従においてそれら両者に耳を傾け帰属しているのである。』⁴⁷聞くことにおいて、人は聴従するのであり、つまり互いに帰属しあうのである。

もちろん、ハイデガーは、人間はむしろ日常的には聞き従わない存在であることに気づいている。だが、そうした聞き従わないことも聞くことがあるから生じるのである。「相互に聞きつつ聴従しあうことは、共存在がそのうちで形成されるものなのだが、『随行』とか同行とかいう可能的な諸々の在り方や、聞き従わないとか逆らうとか、反抗するとか離反するとかという欠性的な諸様態を、それはもっている」。⁴⁸

現代社会は、とくに聞き従うことの難しい社会で

あろう。自己決定、自己責任ということが強調される。成熟社会や消費社会の到来によって、ますます私たちは他者と切り離された個を生きることを余儀なくされていくし、また大きな物語を失い、つまり共に生きる世界である共世界が見えなくなってしまっている。ハイデガーの言葉を用いれば、人は「人的資源」に成り下がってしまっている。

こうした社会においては、聞くことは同調を意味するようになり、また社会を風景化が支配するようになる。同調や風景化は聞くことの欠如である⁴⁹。現代は、共存在としての私たちの生が危機にさらされている時代なのである。だが、2で考えてきたとおり、ハイデガーの思索を証示する、人は共存在であるといった証拠は人間の歴史のなかに溢れている。そしてハイデガーによれば、それは聞きあう存在としての人間存在へとたどり着く。

4. 人間にとってのプレゼントのもつ意味

(1) A子によるプレゼントのエピソード

一つのエピソードを取り上げることからはじめよう。

相談室での出来事である。その日は、相談室でお楽しみ会をやっていた。そのなかに、普段から集団活動が苦手な子(A子)いた。その日も、一緒にゲームなどをやるときには、彼女は、もういいやといって途中で抜けたりしてしまっていた。コミュニケーションをとるのが苦手なので、ゲームなどをしていても、孤立感を感じてしまうようだった。途中一人の男子(B男)が、女性の相談員に大きなふくろうの縫いぐるみをプレゼントした。B男は、その縫いぐるみをめぐって、その女性の相談員と会話を楽しんだ。お楽しみ会が終わると、A子は、陰のほうにいて、自分のかばんの中から可愛らしい便箋と封筒のセットを取り出して、女性の相談員のところへ行き、こう言って渡した。「これB男君から渡してって言われたから。」

日常の小さなエピソードである。しかし、いったいこのエピソードはどのような意味をもっているのだろうか。

まず考えたいのは、A子にとってのプレゼントす

ることの意味である。一般に、プレゼントは相手を喜ばせることを目的に手渡される。

ところが、このエピソードを離れても、子どもたちのプレゼントにちょっと違った意味があることに気づく。たとえば、私も可愛らしい便箋封筒セットをもらったことがある。そのとき、プレゼントしてくれた子は、「頭がおかしくなったと思われるから使っちゃだめだよ」と言って渡してくれたのである。たしかに、その可愛い便箋封筒セットは私に似つかわしいものではなく、彼女に言われるまでもなく到底私が使うことのできるものではなかった。

だが、それなら、なぜ彼女は、そんなものを私にくれたのだろうか。そこにはプレゼントが必ずしも相手を喜ばせるために贈られるとは限らず、むしろ自分を受け止めろというメッセージがそこにこめられているのではないかということが想像される。だとすれば、プレゼントは自分の分身であり、したがって相手の喜ぶものではなく、自分の好きなものが贈られるのである。

A子のプレゼントに戻ってみよう。A子はコミュニケーションが苦手で、お楽しみ会でも、ほとんどその女性の相談員と言葉を交わすことはなかった。だが、A子は、コミュニケーションをとりたくなかったのではなく、とれなかったのである。そしてコミュニケーションの手段として、言葉ではなくプレゼントが選ばれた。

ここには、A子の、隠されてはいるが、それだけに大切なメッセージが込められている。自分を受け止めてほしいというメッセージである。つまり他者に自分と「つながる」ことを求めているのである。そしてつながることで、その場に居場所を感じられるようになる。たぶん、それまで相談室に居心地の悪さを感じていたであろうA子は、最後に、プレゼントを渡すことで、自己（の居場所）を取り戻そうとする。つまり自己であるために「つながり」が求められるのである。自己であることには、本質的に他者と「つながった」存在であることが含まれているのであろう。

またB男の名前が使われたことは、むしろメッセージを「受け止めてもらう」ことがA子にとって重要な意味をもっていたことの裏返しであろう。そしてまさに「受け止めてもらうこと」、つまり「受け取ってもらう」というそのこと自身が強く求めら

れていたこともわかる。彼女の求めていたことは、そのプレゼントを渡したことにより、その後、その相談員に優しくしてもらおうといった「つながり」ではない。そうだとするならば、B男の名前を使ったことで、プレゼントの意味は台無しになってしまうからである。A子の求めていたことは、そうしたことなく、もっとデリケートで、身体レベルの「つながり」なのである⁵⁰。

(2) A子が「共存在」であることの意味

このエピソードから私たちは何を学ぶことができるのだろうか。

第一に、人間はやはり「共存在」であるということである。すでにハイデガーの思索に基づいて考えてきたように、自己を取り戻すためには、世人自己からの取り戻しを必要とする。ハイデガーはこの取り戻しを単独化と考えているが、単独化とは、必ずしも他者との関係性から切り離されることではないのではないかと考えられるのである。

たしかにもともとA子は、他者やその場になじまないで存在していた。A子は、他者を喜ばすためではなく、自分を受け止めろというメッセージを込めてプレゼントを渡す。このプレゼントには、相手を喜ばせることではなく自分を受け止めろというメッセージが込められていること、またその後自分が見返りを受けることから切り離されているということ、この二点により、市場主義的な自己と他者とのやりとりを超えている。そしてA子は、こうした経験を経ることにより、自己であることの基盤となる安心感を育んでいるのである。

つまり、A子のエピソードは、人間が共存在であるということを端的に証示しているように思われるのである。けっして、共存在であることは頹落を意味しているのではなく、それは、人間存在にとっての本質的な在り方なのである。そして共存在は、私たちの通常のものから見方から自由であるという意味で、世人自己から単独化しているといえるのであるが、しかし決して他者からの単独化ではなく、むしろ世人自己とは異なるレベルで他者に受け止めてもらうこと、「つながる」ことを求めることなのである。

そしてこのつながることによって、A子は共存在を生きると同時に、自分らしい自己として自己を生

き直しはじめる。自己であることと共存在であることを両立させるためには、日常の他者関係の垢を洗い流すことが必要である。

ハイデガーは良心において、「非性」に触れているが、まさに自己は、おのれの存在を根拠づける力を欠いているのであって、だからこそ、他者を必要とするのである。だが、この他者は、すでにさまざまの例を用いて証示してきたように、自己があってはじめて他者が生じるといった他者を意味するのではなく、自己の奥深くに始めから巣食っている他者であり、良心の声は外からやってくるのではなく、自己の内から、しかし自己ではない、見知らぬ「それ」としてやってくるのである。ここには興味深い逆説が存在している。自己は他者に自己を譲り渡すことによって豊かな自己になっていくということである。A子は、他者に自己を受け止めてもらうことによって、おのれの内にある隠された他者の覆いを取り除き、そうしたことをとおして豊かな自己になっていくと解釈することができるのでないだろうか。

第二に、共存在が、自己を他者に受け止めてもらうという構造のなかに現れるのではないかということがある。人は、他者に受け止めてもらうということ、つまり他者の顧慮的気遣いの対象となることを必要とする。ということは、他者もやはり顧慮的に気遣う存在である現存在なのである。つまり、他者は「共現存在」なのである。

この点は、ハイデガーのとらえる「聞くこと」とも深くかかわっている。A子が聞くことを求めていることは、聞いてもらうこと、つまりは自己が自己のうちに完結せずに聞かれることによって自己となることを示していると同時に、聞くことが「聴従すること」、すなわち「属していること」とかかわっていることを意味している。A子にとって、プレゼントをもらってもらうこと、つまりは彼女のプレゼントを聞き取ってもらうことが、彼女のともに属しているという世界（共世界）との関係性を示唆する。聞くことは共同性を開放するのであって、つまり私たちが「共存在」であることを証示しているのである。

この点をプレゼントを受け取る側から見ると、どうなるだろうか。聞くことは、他者を他者として、つまりは「共現存在」として受け止めることを意味

する。だとするならば、真に異質で多様な存在が受け止められる世界を作り出していくためには、聞くことをこの社会のなかに取り戻していくことが求められるということになるはずである。多様性を受け止め、聞き取っていくことが、子どもたちの豊かな自己を育むことになる。一方、多様性を大人が受け止め、聞き取ることなしに放置するならば、多様性が認められているはずの世界を、不思議なことに単独化（同調と風景化）が支配することになるだろう。

とするならば、A子が教えてくれていることは、学校を「聞くこと」の場にしていくことが、子どもたちの個性を育て、そして同時に社会性を育むことになっていくのではないかということである。単独化と同時に豊かな他者性（多様性）との「つながり」を作り出していくためには、まずは聞き合う共同性を作り出していくことを求められるのである。

おわりに

小論のはじめに述べたように、現代社会は「大きな物語」を失いつつあり、つながりを断ち切る社会になりつつある。つまり、現代社会は、共同体の解体に晒された時代なのである。すでに述べたように、新自由主義社会においては、個人の利益を求めることが当然となり、ひとびとの「つながり」は失われ、故郷を喪失した根無し草のような生き方を余儀なくされている。そしてこうした状況のなかで、その共同性は、同調と風景化に彩られ、あたかも共同性そのものが悪であるかのようにとらえる見方が支配するようになってきている。いじめ研究者の内藤等の考え方はこうした状況のなかで現れてきている。

だが、いっぽうで、人間存在が、つねに「つながり」のなかを生き残ってきていることが、私たち人間存在一人ひとりの根底に他者が存在していること、つまり私たちの個のうちには深く他者が根づいていることを示している。その意味で、個性と共同性を二項対立でとらえることは間違っているのであり、個性と共同性は、相互に入り組みながらお互いを成り立たせていることが予期されるのである。人類の歴史は、はっきりと共同性が個人の根底を続べていることを示している。したがって共同性の否定は、人間存在の否定なのである。

そこで、小論においては、共同性を悪ととらえるのではなく、共同性の抱える課題にも注意を払いながら、新しい共同性の可能性をさぐるため、ハイデガーの思索に示唆を得て、考えをすすめてきた。

ただ、本論での思索は、一つのスケッチに過ぎない。これまでの考察によって、第一に主観が存在し、その後、その主観が世界や他者とかわるということとは否定された。つまり他者が自己による感情移入によって理解されるというのは正しくないことになる。人間は、すでに他者を内在させている、あるいは逆に人間はすでに「外部」に存在しているのである。

ハイデガーは、さらに民族についても触れている。「運命的な現存在は、世界内存在として、本質上他者たちと共なる共存在において実存するかぎり、そうした現存在の生起は、共生起であって、全共同運命として規定される。この全共同運命でもってわれわれが表示するのは、共同体の、つまり民族の生起である」¹。『存在と時間』において、民族に触れているのは、この一箇所だけだが、その後のヘルダーリン論や『哲学への寄与』を読み解くことにより、さらに共同性の意味を探って行きたい。

注

- 1 「つながり」は曖昧な概念だが、小論においては、とくに定義することなしに、用いることにする。
- 2 イギリスのガボールが提示した社会である。
- 3 免許更新講習の講師に対する受講者のアンケートを見ても、消費者意識が教師にも広がってきていることがわかる。
- 4 この二つ目の理由が強調されることが多いが、私は一つ目の理由、つまり自尊感情の低下が子どもたちから頑張りを奪っている点がより重要な意味をもっていると考ええる。
- 5 マイケル・サンデル. 2012. 『それをお金で買いますか』(早川書房)、p.11.
- 6 同書、p.16.
- 7 同書、p.17.
- 8 同書、p.20.
- 9 同書、p.17.
- 10 内藤朝雄. 2009. 『いじめの構造』(講談社)、p.164.

- 11 同書、p.32.
- 12 たとえば、同書、p.35.
- 13 同書、p.40.
- 14 同書、p.40.
- 15 同書、p.47.
- 16 同書、p.127.
- 17 同書、p.132.
- 18 同書、p.132.
- 19 同書、pp.132-133.
- 20 同書、p.170.
- 21 同書、p.174.
- 22 同書、p.256.
- 23 鷺田清一編著. 2006. 『食は病んでいるか』(ウエッジ)
- 24 今日の社会のなかで、子育ての孤立化によるストレスが問題となっているのは、ある意味で当然だと考えられる。そもそも人間存在にとって子育ては「他者とともに生きる存在」であることの出発点であるのだが、そうした機能の低下は、人間存在そのものの在り方への問いかけを意味するからである。
- 25 この点についてはさらに詳しく論じたいが、小論の範囲を超えているので、別の機会に譲ることにする。
- 26 山口真美らによる近赤外分光法による実験。
- 27 こうした事実は、私たちにとっての道徳性をどのように考えたいのかということに示唆を与えてくれる。
- 28 鷺田清一編著. 2006. 『<食>は病んでいるか』(ウエッジ) p.167.
- 29 同書、p.168
- 30 同書、p.170.
- 31 同書、p.170.
- 32 同書、p.170.
- 33 同書、p.170.
- 34 メソポタミア文明において世界最古の都市ができたが、そこでは麦がお金として流通した。鉢に入れられた麦がお金として機能し、そこに得意分野を生かした職業の分化が生じた。その結果、社会全体が豊かになり、生産量は3倍になったという。
- 35 以下において、ハイデガーに関する「本来的自己」、「死」「良心」といった概念を取り上げる

- が、十分な議論をすることは小論の範囲を超えているので、簡単な紹介にとどめることにする。
- 36 ハンナ・アーレント. 2002. 『アーレント政治思想集成1』(みすず書房) p.244.
- 37 ハイデガー. 2003. 『存在と時間Ⅱ』(中央公論新社)、p.288.
- 38 同書、p.319.
- 39 ハンナ・アーレント、上掲書、p.245.
- 40 ハイデガー、上掲書、p.350.
- 41 この点については、別途丁寧に検討する必要があるだろう。小論では扱わない。以前に、拙論. 2004. 「子どもたちの多元的自己と同調：新しい物語創造の可能性を探って」『教育方法学研究』29巻、pp.1-12、及び拙論. 2011. 「リストカットに隠された『同調』への抵抗—『存在の不安』の分析をとおして」『学ぶと教えるの現象学研究14』、pp.45-54で論じたことがある。
- 42 ハイデガー、上掲書、p.372.
- 43 同書、p.373.
- 44 同書、pp.403-404.
- 45 ハイデガーの「破壊」については、拙論. 1998. 「教育における破壊の意味」『茨城大学教育学部紀要(教育科学)』47巻、pp.271-290で論じたことがある。
- 46 ハイデガー、上掲書、pp.82-83.
- 47 同書、p.83.
- 48 同書、p.83.
- 49 この点は、注の41でも触れたように、重要な論点なので、別に論じてみたい。
- 50 なぜ、B男の名前が使用されたかのかについても丁寧な考察が必要であろう。そのためには他者との「つながり」と嫉妬との関係を明らかにすることが求められるだろう。小論では扱わず、別の機会に論じたい。
- 51 ハイデガー. 2003. 『存在と時間Ⅲ』(中央公論新社)、p.191.